

宮沢賢治「永訣の朝」について

宮沢賢治「永訣の朝」【文字サイズ：12ポイント】

(詩の引用文【文字サイズ：7ポイント】)

(「論文のタイトル」【文字サイズ：12ポイント】)

(論文執筆者の名前【文字サイズ：10ポイント】)

(論文の引用文【文字サイズ：8ポイント】)

(引用文献の書誌情報【文字サイズ：7ポイント】)

【解説】(自分の名前【文字サイズ：12ポイント】)

(論文の要約 200〜300字程度)

【文字サイズ：10ポイント】

(論文を踏まえた自分の意見 200〜300字程度)

【文字サイズ：10ポイント】

(詩に対する自分の評価 200〜300字程度)

【文字サイズ：10ポイント】

高村光太郎「狂奔する牛」について

狂奔する牛

ああ、あなたがそんなにおびえるのは
今のあれを見たのですね。
まるで通り魔のやうに、
この深山のまきの林をとどろかして、
この深い寂寞の境にあんな雪崩をまき起して、
今はもうどこかへ往つてしまつた
あの狂奔する牛の群を。

今日はもう止ませう、
画きかけてゐたあの穂高の三角の屋根に
もうテル ヴェルトの雲が出ました
槍の水を溶かして来る
あのセルリヤンの梓川に
もう山山がかぶさりました。
谷の白楊が遠く風になびいてゐます。
今日はもう画くのを止して
この人跡たえた神苑をけがさぬほどに
又好きな焚火をさせう。
天然がきれいに掃き清めたこの苔の上に
あなたもしづかにおすわりなさい。
あなたがそんなにおびえるのは
どつと逃げる牝牛の群を追ひかけて
ものおそろしくも息せき切つた、
血まみれの、若い、あの変貌した牝牛をみたからですね。
けれどこの神神しい山上に見たあの露骨な獸性を
いつかはあなたもあはれと思ふ時が来るでせう。
もつと多くの事をこの身に知つて、
いつかは静かな愛にほほえみながら――

「高村光太郎における動物表象

――自己と他者との相克をめぐって――」

鳥居 万由実

光太郎の動物詩を自己と他者との問題系から見た時、およそ三種類に分けることが出来る。(1)動物を理想像としたもの(2)動物を被抑圧者としてみたもの(3)動物の他性と向き合うもの、である。尚、この三要素の幾つかを兼ね備えた詩もある。

(中略)

このように(1)と(2)のタイプでは、自己と、その他者である俗世間を神聖／俗に分割し、倫理的な正当性は前者にのみもつぱら付与されている。自己／他者の対立は、光太郎が理想とする「自然」の力を体現する動物と、卑俗な人間界という、動物／人間の対立構造と重ねられている。

しかし、光太郎には(3)動物の他性と向き合う詩もあった。そこでは二項対立に回収できない、複雑な自己と他者の葛藤を省察する姿勢が見られ、自然概念、そしてそれを体現する物としての動物性は、むしろ自他の差異をそのままに、両者を融和的に包摂するものとして働いている。……

鳥居万由実「高村光太郎における動物表象――自己と他者との相克をめぐって――」(『言語情報科学』第十四号 二〇一七 二〇一六)

【解説】(メンバー：吉田、中澤)

「狂奔する牛」は、『智恵子抄』において「樹下の二人」の直後に配置されている詩である。

鳥居の動物詩の分類に従うならば、この詩は(1)動物を理想像としたものとして考えられる。そして、鳥居によれば理想的な「自然」の力を体現する動物は、自己／他者の区分において自己に相当する。

鳥居の論を踏まえると、「狂奔する牛」における「牛」は、語り手である自己(＝高村)の隠喩であると考えられる。この詩を書いた頃、高村が貧窮しながらも芸術活動に打ち込んでいたことを考えるならば、「ものおそろしくも息せき切つた」「血まみれ」の姿は、そつした高村の姿を表していると言える。さらにそつした「露骨な獸性」の牛は「神々しい山上」にいとと表現することで、牛＝高村に芸術活動に専念するものとしての聖性を付与している。

また、この詩にはあなた(＝智恵子)がその牛の姿におびえる描写があるが、詩の傍線部からは、そつした牛(＝高村)の姿を智恵子に受け入れてほしいと願う高村の思いを読むことが出来る。総じて、光太郎と智恵子の夫婦愛をより円熟にしたいという思いと、智恵子への愛情が読み取れる穏やかな詩である。

意見を踏まえた作品評価

論文を踏まえた自分の意見

論文の要約